

## 『枕草子』〈笑い〉端役たち

文化創造専攻 国文学専修

一九〇〇一AJM下 里 葉 摘

### 修士論文要旨

『枕草子』日記的章段に登場する端役たちの〈笑い〉が、『枕草子』に与える意義について考察した。中宮定子は正暦元年に一条天皇のもとに入内するが、五年後の長徳元年に父の藤原道隆が病没し、その翌年に兄弟である伊周、隆家が政治的に失脚したことにより、彼女の后妃としての境遇は不安定なものとなった。それにもかかわらず、『枕草子』日記的章段には多くの〈笑い〉が認められ、その明るさが指摘されてきた。

第一章では、修士論文で扱う章段を絞り込んでいった。これまで、定子の〈笑い〉や、〈笑い〉の対象としての清少納言についての研究に大きく傾き、端役たちの〈笑い〉を中心に据えた研究は行われてこなかった。そこで、端役が〈笑い〉章段に焦点を当て、大内裏の内が場となる章段では、端役が出来事に積極的に介入していないことを突き止めた。したがって、修士論文では、大内裏の外が場となる章

段を扱うこととした。

第二章では、定子の支配空間として、一三七段・九五段・六段を取り上げ、端役たちの〈笑い〉の性質を明らかにした。それは、定子が支配する空間では、まず端役たちの優位性が〈笑い〉によって示されていたが、その上で、定子や女房など定子後宮の人々が〈笑い〉ことで端役の持つ優位性を逆転させていたということである。

第三章では、定子の不在空間として、三三段・九九段を取り上げ、端役たちの〈笑い〉の性質を明らかにしようとした。しかし、定子不在の空間で起こる端役たちの〈笑い〉は、定子の支配空間とは異なり、散発的なものになっていたことが確認された。

第四章では、端役たちの〈笑い〉の意義について考察した。『枕草子』には、端役の持つ優位性を〈笑い〉によって逆転させようとする女房たちの姿が記されていた。そして女房たちの〈笑い〉の後には必ず定子の〈笑い〉も記されているのである。定子の〈笑い〉は、清少納言や平生昌といった劣位に置かれた人物を許容するものであった。定子が支配する空間における端役たちの〈笑い〉は、定子の〈笑い〉に収斂していくのである。苦境にありながら、盛時にあつた精神的余裕を失わず、理想的な中宮であり続ける定子の微笑みを記すために、端役たちの〈笑い〉が機能しているのである。